



学生時代の『古事記』との出会いが、人生の礎となりました



吉田 光臣 さん
神道文化学部124期卒
埼玉県さいたま市鎮座
調神社 権禰宜



私は本学124期、平成27年度の卒業生です。振り返ってみると、入学当初の驚きは、『古事記』講読の授業でした。もちろん『古事記』は入学以前に一読し、大まかなあらすじは知っていました。しかし教室における武田先生の語りは、まさに神話の情景が目の前に浮かぶような、活き活きとしてわかりやすいものだったのです。

在学中、アメリカの大学へ短期留学の機会をいただいた際には、神社や神道を巡って、現地の方々から質問攻めに会うことができました。学部での学びをもとに、自分なりに懸命に対応しました。帰国後も、留学生たちの神社参拝に同行する機会がありました。外国の方々の神道文化への強い関心を、実感させていただきました。

卒業後は、しばらく北海道内の神社に奉職しました。外国人参拝者に英語で対応することもありました。そうし

た場面で大切なのは、異文化圏の人にも通じるよう、いかにわかりやすく端的に説明するかということです。特に神道用語を外国語に置き換える際には、言葉がもつ細かなニュアンスを吟味し、一つ一つ単語を選ぶ必要がありました。

そうした際に、やはり導きの糸となったのは、最初に述べた古事記講読の授業、そして3年次以降の武田先生のゼミでの学びでした。武田ゼミは、神職の家に生まれた人、そうでない人も一堂に会して、お互いに隔てなく語り合い、神道の心・古事記の心をどうやって伝えていけばよいのか、一緒に考えを練り上げてゆく場もあったと思います。

現在は父が宮司として奉仕する埼玉県の神社で神明奉仕に動んでいます。大学生活で得たものを自らの礎とし、今後の神職としてのご奉仕に活かしていきたいものと念願しております。

吉田さんは
こんな学生でした！

武田 秀章 教授
神道古典・神道史
〔「古典講読ⅠA・ⅠB」担当〕



吉田さんは、卒業以来ずっと武田ゼミOB・OG会の幹事を務めています。1年に1度、しみじみとした語らいの場を、いつも縁の下力持ちとして、さりげなくセッティングしてもらっています。
学部のゼミ論で、大国主神の無二のサポーター役・少名毘古那の神の活躍を掘り下げた吉田さん。持ち前の行き届いたサポート力を以て、地域社会を縁の下から「作り堅め」なす今後のご活躍を、只管祈念して已みません。

令和8年度 総合型選抜、神道学専攻科、別科神道専修（Ⅰ・Ⅱ類）入試日程

入試制度	出願期間(消印有効)	試験日	合格発表	入学手続期間(消印有効)
神道・宗教特別選考(Ⅰ期) 〔神社本庁包括下の神社〕及び〔神道系教団〕の後継者を対象とした入試です。	9/16(火)～9/22(月)	1次：書類選考 2次：10/19(日)	1次：10/8(水) 2次：11/1(土)	11/1(土)～11/7(金)
神職養成機関(普通課程)特別選考	9/16(火)～9/22(月)	10/19(日)	11/1(金)	11/1(土)～11/7(金)
公募制自己推薦(AO型) 〔神道文化学部でぜひとも神道文化・宗教文化を学びたい〕という強い意欲を抱く志願者を選抜します。	9/29(月)～10/3(金)	1次：10/19(日) 2次：11/9(日)	1次：10/22(水) 2次：11/19(水)	11/19(水)～11/26(水)
神道学専攻科 4年制大学を卒業した神職子女が、1年間で神職資格(明階検定合格、正階授与)取得を目指す課程です。	11/1(土)～11/5(水)	11/23(日)	12/3(水)	12/3(水)～12/10(水)
神道・宗教特別選考(Ⅱ期) 〔神社本庁包括下の神社〕及び〔神道系教団〕の後継者を対象とした入試です。	2/4(水)～2/9(月)	1次：書類選考 2次：3/2(月)	1次：2/18(水) 2次：3/11(水)	3/11(水)～3/18(水)
別科神道専修Ⅰ類・Ⅱ類 高等学校の卒業者が、神職資格を目指す課程です。	2/4(水)～2/9(月)	3/2(月)	3/11(水)	3/11(水)～3/18(水)

※出願資格や〔入学試験要項〕など詳しい入試の情報については、國學院大学ホームページをご覧ください。本学入学課(電話03-5466-0141)へお問い合わせください。志願される方はお早めに〔入学試験要項〕をご確認ください。

神道・宗教特別選考を志望する方々へ

本学では、(1)神社本庁所属神社の神職、またその家系の子女で、継承者となる方々もしくは、(2)神道系教団体所属者の子女で、将来、後継者となる方々を対象にして、〔神道・宗教特別選考〕という入試制度を設けています。詳細は國學院大学のホームページをご覧ください。

オープンキャンパス(渋谷キャンパス) 令和7年 8月2日(土)／3日(日)／23日(土)

※学年は取材時のものです。



この学部でしか学べないことがある

神道文化学部



もっと日本を。もっと世界へ。



國學院大學



日本でただ一つのこの学部で、新しい一步を踏み出してみませんか？



笠原 羽奈 さん

神道文化学部 4年
奉職・就職内定

笠原さんは
こんな学生！

鈴木 聡子 准教授
〔「神道史学演習Ⅰ・Ⅱ」担当〕



笠原さんは、大学生活で青葉雅楽会に所属し、主に横笛(龍笛)を熱心に練習しておりましたが、そこから興味関心が芽生え、ゼミでは、横笛の歴史について熱心に研究していたことが印象的でした。

特に歴史史料を緻密に分析しながらも、演奏者ならではの視点から解釈を加え発表をする姿は、他のゼミ生に対して学ぶことの楽しさを示してくれる素晴らしいものでした。これから神職として、社会人として、さらなるご活躍を期待しております。



私の祖母は、郷里の神社で宮司を務めています。地域の方々との繋がりを大切にしながら、熱心に奉仕する祖母の姿を、すぐ近くで見てきました。「私も祖母のような神職になりたい…」幼いころからずっとそう思ってきました。その思いが、神道文化学部入学のきっかけとなったのです。

大学生活で特に心に残っているのは、青葉雅楽会での活動です。青葉雅楽会は、日本の伝統音楽である雅楽の演奏を行うサークルです。雅楽を学ぶ中で、自分の世界が大きく広がったのを感じました。尊敬する先生方や先輩たち、苦楽を共にした同期の仲間たち、頼もしい後輩たち…。一緒に稽古に勤しみ、共に舞台上で奏でた経験は、どれも私の大切な宝物です。

中でも本学ならではの伝統行事、「観月祭」は、私にとって忘れられない経験となりました。この行事は、神道系サークルの学生たちが力を合わせて行うものです。私は、2年次に横笛の楽人として、3年次に打物と舞楽舞人として参加しました。

特に印象深かったのは、3年次の舞楽です。その年は経験者が一人もいませんでした。先生方のご指導のもと、後輩たちと一緒に、何度も稽古を重ねました。おかげさまで、自分たちのベストを尽くした舞台を作り上げることができたと思っています。

卒業後は、都内で福祉の仕事に就きながら、兼業神職として宮司の祖母をサポートしていく予定です。この学部で培った神道の精神を活かし、地域の方々との繋がりを大切にしながら、末永く勤めていきたいと思っています。

大学は自分次第で可能性が無限に広がる場所です。とりわけ神道文化学部は、数多くの方々と関わりながら、常に新しい挑戦を重ねることで、人として大きく成長できる「場」だと思います。志願者の皆さん、日本でただ一つしかないこの学部で、新しい一步を踏み出してみませんか？



鈴木 聡子 准教授

神社史・神道史

鈴木先生は
こんな先生！

笠原 羽奈 さん
〔「神道史学演習Ⅰ・Ⅱ」受講〕



鈴木先生は、ゼミ生一人ひとりの色を引き出しながら、的確なご指導をしてくださいます。いつも明るくてユーモアのある鈴木先生。その分け隔てのないお人柄が、学生たちから大人気です！



私自身、神道文化学部になる前の、文学部神道学科の卒業生です。学部で学んだあと、大学院で研究を続け、平成31年に神道文化学部の教員として着任しました。

私の研究は、神社の祭りの歴史についてです。その中でも特に神社で一年を通して恒例に行われる神社年中行事が、いつ、誰によって、どのように創始されたのかということに興味を持って調べております。

このテーマで研究するためのきっかけは、恩師と学友の存在です。学部学生時代、同じ志を持つ仲間と全国の神社に参拝し、その歴史と文化に触れたことで生じた興味や疑問などを、共に調べ語り合ったことにあります。また、調べていく過程では先生に密に御指導をいただき、助言を受けながら学びを深めていきました。このような何物にも代えがたい貴重な経験こそが私の研

究テーマの出発点となったのです。

本学部の魅力は、私が経験をしてきたように、常に学生に寄り添いながら学びを示すなどして学生生活を見守ってくれる学部教員の存在と、「神道文化」という共通の興味関心を強く持ち全国から集まって来る学友の存在にあると思います。

また、学生達が主体となって舞楽や管絃を奏する10月の観月祭などを執り行っていることも魅力の一つです。皆で一体となって行事を運営する学生の姿はなんとも充実感に満ちたものがあります。このような環境のなかで、同じ志を持つ学友とともに自分らしい学びを深め、充実した学生生活を送ってみてはいかがでしょうか。

「神道文化」に憧れる学友たちが、全国から集まります！





神道文化学部でよく学び、よく遊びましょう！



眞方 雅也 さん

神道文化学部 4年
奉職内定



高校生の頃、ある神職の方の暖かいご配慮に触れたことが、神職を志すきっかけになりました。

「私も、誰かの心に寄り添えるような神職になりたい…」そんな思いから、神道文化学部に入學したのです。

大学生活では、神道と神社について学ぶのは勿論のこと、雅楽や祭式、衣紋を行う学生サークルに所属し、神職としての技能を深めることに専念しました。

また様々な神社で助勤をさせていただき、学生の身ながら、数多くの経験を積む機会に恵まれました。助勤では、同期の友人たちと一緒に奉仕することが多く、全員で協力しての祭典奉仕はもちろん、そのあとの楽しい直会の宴など、思い出は尽きません。おかげさまで、まことに楽しく稔り多い大学生活を送ることが出来ました。

本学恒例の「観月祭」で舞人を務めさせていただいたことも、私の大切な財産になりました。顧問の先生方のご指導のもと、仲間たちと協力して一つの行事をつくりあげるという経験は、何物にも代えがたいものでした。顧みれば、この四年間、観月祭をはじめ、雅楽サークルの青葉雅楽会、外部団体の日本雅楽会等で、数多くの舞台に立

たせていただきました。まことに雅楽漬けの学生生活でした。

神職必須の祭式作法については、とりわけ星野光樹先生ご担当の「神社祭祀演習」で鍛えていただきました。授業では、先生からそれぞれの作法の意味や考え方について懇切に教えていただきました。時には先生と神明奉仕の道の何たるかについて、しみじみと語り合うこともありました。おかげさまで、神様に御奉仕する心構えを、しっかりと培うことができたと思っています。

学部の四年間、こうして様々な経験を積ませていただいたことから、将来は神職の道に進むか、雅楽の道に進むか、しばらく迷っていた時期もありました。けれども星野先生のと押しもあり、断然、神職の道に進むことを決意しました。卒業後は、よき「仲執持ち」を目指し、祭祀厳修に努めたいものと願っております。

大学生活は人生最後の夏休みと言われるかもしれませんが、若さのパワーで、何事にも挑戦できる時期でもあります。大学で仲間と育む絆は、一生モノです。志願者の皆さん、神道文化学部でよく学び、よく遊びましょう。いろいろな事に挑戦しましょう！



星野 光樹 准教授

神社祭祀・国学

星野先生は
こんな先生！

眞方 雅也 さん
〔「神社祭祀演習ⅢB」受講〕



神道文化学部には個性豊かな先生方が揃っていますが、なかでも星野先生は、一番フレンドリーで親しみやすく、学生と分け隔て無く向き合ってくれる先生です。私は2年次からお世話になっていますが、学業の事からプライベートな悩みまで、何でも親身になって相談に乗っていただきました。

学生一人一人にとことん向き合ってください、とても面倒見の良い先生です。



私は茨城県水戸市に生れ、高校は商業高校で勉強しました。大学では、より精神的な分野について学びたいと思い、國學院大學文学部神道学科に進学し、神職資格も取得しました。

大学院に進学し、そこで神道の根幹ともいべき祭りと、その実践方法である祭式を学ぶことの重要性を指導教授である故阪本丸先生から教えていただき、研究テーマを近代の祭式に決めました。

最初の発見は、明治維新以降に成立する新しい国家祭祀で、天皇みずから玉串を奉り拝礼するという祭儀が成立していたことです。これは当時、祭式を立案した国学者によって、神武天皇みずから神々を祭祀した伝承に基づき、その幣帛(お供え物)として玉串が相応しいと考えられたことによります。

その後、国学者による伝統の復古と祭式の成立という問題を幕末期から捉

えてみたいと思い、平田派国学者で京都の向日社祠官であった六人部是香に焦点をあてて、研究を進めることにしました。

六人部は、どんな小さな神社であっても、そのご祭神は国家をはじめ氏子の人々に至るまで守護し、繁栄を齎す存在であり、神職はそのようなご祭神に対し、本来的な祭式に基づき、誠心誠意、祭祀に奉仕すべきであると述べています。

現在の祭式は、六人部をはじめ、先人たちが祭祀の伝統を守りつつ、本来的なものを考え、信仰に相応しいものにしてきた努力のうえに成っているものです。

神職を目指すとする学生諸君は、このことに思いを致し、この國學院大學で、神職としての矜持が持てるよう、しっかりと励んでもらいたいと思います。

先人たちが大切に練り上げてきた祭式作法、しっかりと身に付けよう！



國學院大學の奨学金制度

※令和7年度の制度です。社会状況の変化を踏まえて変更することがあります。

1年次は 全員支給	神道・宗教 特別選考新入生対象	返済不要 神職子女奨学金 …〔1年次生〕自宅外通学者40万円／自宅通学者20万円支給(全員、年額) …〔2年次以上〕自宅外・自宅通学者ともに10万円支給(学業成績の上位20名以内、年額)
夜間主学生対象 返済不要	國學院大學フレックス特別給付奨学金 ※令和7年度入学者対象(家計・成績要件等、条件あり) ※令和8年度入学者向けの制度は変更の可能性があり	※条件あり
神社界からの奨学金	■神社本庁育英奨学金 返済不要 ※条件あり ■全国敬婦人連合会育英奨学金 返済不要 ※募集されない場合があります	■稲荷奨学金(伏見稲荷大社) 返済不要 ※条件あり

詳しくは、大学ウェブページをご覧ください。

<http://www.kokugakuin.ac.jp/student/scholarship>





この学部で「一生ものの宝」と出会いましょう！



磯部 紗於里 さん

神道文化学部 4年
奉職・就職内定



私の実家は、代々神社を受け継ぐ世家です。幼い頃から神道を身近に感じていました。

私の両親は揃って院友です。「東京で大勢の人と関わり、沢山のことを学んでおいで…」そんな父母のあと押しもあって、本学に進学しました。

けれども実際に入学すると、新型コロナウイルスの猛威が待っていました。授業はオンラインとなり、学友ともあまり関わることができません。「これからどうなってしまうのだろう…」そんな不安な日々が続きました。コロナ終息ののち、サークルや課外活動を通じて、ようやく多くの人と関わることができるようになりました。そんな中、私は、雅楽という日本古来の伝統音楽に触れる機会に恵まれたのです。

思い出深いのは大学行事の観月祭です。2年生の時は龍笛で参加し、3年生では典儀(司会)を務め、台本を一から作るという貴重な経験をさせていただきました。学生として初めての司会進行という緊張感がありましたが、先生方をはじめとする多くの方々のお力添えのもと、無事に本番を終えることができました。

かけがえのない仲間たちとの協力を通して、私たちならではの観月祭を作り上げることができたと思っています。その達成感と高揚感は、まことに格別のものがありました。学生生活の

中で最も貴重な経験でした。

3年次からの基幹演習では、宗教学の遠藤先生のゼミに入りました。先生のご指導のもと、自分自身の納得がいくまで研究テーマを深めることができました。遠藤先生からは、様々な研究者や文献を教えてくださいました。心から感謝しております。

卒業後の進路については、当初は奉職一筋で考えておりましたが、奉職セミナーで拝聴した「生業と使命は分けても良い」という言葉が、私にとっての気付きになりました。就職活動を始めると、珍しい学部のため、カリキュラムや実習についての質問が多く寄せられました。神道文化学部というブランドが、就活の大きな武器になったのです。

春からは地元で兼業神職としてのご奉仕が始まります。神道の学びをベースとして、使命としての神職、生業としての職業の両面から、地域の方々と交流を深めていきたいと思っています。

私はこの学部で、多くの方々との出会い、私の人生を輝かせてくれる雅楽という宝物と出会うことができました。「神道文化学部に入學してよかった…」心からそう思っています。志願者の皆さんが、この学部で多くの仲間たちと関わり、自分を輝かせる「一生ものの宝」と出会うことを願っています。



遠藤 潤 教授

日本宗教史・近世思想史

遠藤先生はこんな先生！

磯部 紗於里 さん
(「宗教学演習Ⅰ・Ⅱ」受講)



遠藤先生はとても優しい先生です。発表後の質問タイムでは、生徒一人ひとりに合わせた適切なアドバイスをしてくれます。

「こういう本があるからぜひ読んでみるといいよ」「〇〇という研究者がいるよ」…幅広い知識でご教示していただきました。先生に教えていただいたからこそ、全力投球で思う存分の研究をすることができたと思っています。心から感謝しています。



私は宗教学を専門としています。高校生の頃、最初は大学で哲学を勉強しようと考えていましたが、より広範な人々の信念や考えを知りたいと思うようになりました。すると、宗教という対象が魅力的に見えてきて、途中で宗教学に進路を変更しました。

気づいてみれば、世の中にはさまざまな宗教があり、それとともに人々は多様な考えを抱えているわけです。宗教学の対象は、古今東西、とても広いのですが、自分は近世・近代の日本の宗教を中心に研究することにしました。

大学で宗教学を専門として学び始めたときに、日本社会にさまざまな死生観があることに興味を引かれるようになり、そこから展開して、死について特徴ある考えを構築した平田篤胤という人の思想をさまざまな角度から考えることになりました。私が論文で発表するような専門領域は限られています。が、関心の根っこには、さまざまな宗

教が人の死や生き方をどうとらえているかという問題がずっとあります。

ゼミでは宗教と死生観についてテーマにすることも多く、参加する学生の中にも、日本や世界のいろいろな宗教の死生観や世界観などを研究対象に選び、発表したり演習論文を書いたりする人が少なくありません。

私ひとりで研究できる対象は限られているのですが、学生みなさんが多様なテーマについて発表したり論文を書いたりするのに触れると、そのつど新たな知見が開かれる感覚で、いつも心が満たされます。

江戸時代の国学者・平田篤胤を通して、日本人の死生観を探求しています

